

《Einführung》

ブルク劇場における御前演奏会 大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

1783年3月23日、ブルク劇場において皇帝ヨーゼフ2世の臨席のもとモーツァルトの演奏会が行われた。3月29日、ヴィーンに住むモーツァルトからザルツブルクの父にあてた手紙にこの演奏会の模様が伝えられている。

親愛なお父さん！

ぼくの演奏会の成功について、あれこれ語るまでもないと思います。たぶん、もう評判をお聞きになったことでしょう。要するに、劇場はもう立錫の余地がないほどで、どの桟敷席も満員でした。——なによりもうれしかったのは、皇帝陛下もお見えになったことです。そして、どんなに楽しまれ、どんなにぼくに対して拍手喝采してくださったとか。・・・(中略)・・・なにしろ、皇帝の御満足は際限がなかったのですから。——25ドゥカーテンを賜りました。

曲目は次の通りでした。

1:新ハフナーシンフォニー。2:ぼくのミュンヘンのオペラから、4つの楽器伴奏による、ランゲ夫人の歌うアリア「もし私が父上を失い」。3:ぼくの予約演奏会の協奏曲から、第3番をぼくの演奏で。4:アーダムベルガーの歌う、バウムガルテンのための劇唱。5:ぼくの最近のフィナーレムジークから、小コンチェルタントシンフォニー。6:当地で好まれている『ニ長調協奏曲』をぼくが演奏。これに『変奏曲 Rondó』をつけました。7:ぼくの最後のミラノのオペラから、タイバー嬢の歌う「私は行きます、急いで」。8:ぼくの独奏で小さなフーガ(皇帝がいたので)と、『哲学者たち』というオペラのアリアによる変奏曲—これはもう一度アンコールしなくてはなりませんでした。それに『メッカの巡礼たち』から「愚民の思うは」の主題による変奏曲。9:ランゲ夫人の歌で、ぼくの作曲による新しい Rondó。10:最初のハフナーシンフォニーの終楽章。

1: Die Neue Hafner simphonie. 2: sang Madme Lange die aria auf 4 instrumenten aus meiner Münchner oper se il padre perdei: 3t spielte ich das 3te von meinen souscriptions-concerten. 4t sang Adamberger die scene für die Baumgarten. 5t die kleine Concertant-simphonie von meiner letzten final musique. - 6t spielte ich das beliebte Concert ex D. wozu ich das variazion Rondeau geschickt habe. 7t sang Madelle täuber die scene aus meiner letzten mailand opera Parto, m'affretto: - 8t spielt ich alleine eine kleine fuge. (weil der kayser da war) und variierte eine aria aus einer opera genannt. Die Philosophen. - musste nochmal spielen. variierte die aria unser dummer Pöbel meint E: aus den Pilgrimm von Mecka. 9t sang die lange das Neue Rondeau von mir. 10. das letzte Stück von der ersten simphonie.

演奏されたのは以下の通りであった。

- 1 交響曲第35番ニ長調「ハフナー交響曲」KV 385 (1782年7月)
- 2 「クレータの王イドメーネオ」KV 366 より第11曲、イーリアのアリア (1781年)

- 3 クラヴィーアと管弦楽のための協奏曲第 13 番ハ長調 KV 415 (387b) (1782/3 年)
- 4 レチタティーヴォとアリア『憐れな私よ、ここはどこなの？—ああ、語っているのは私ではないの』 KV 369 (1781 年)
- 5 セレナードニ長調「ポストホルンセレナード」 KV 320 より第 3 楽章と第 4 楽章を抜粋した、2 本のフルート、2 本のオーボエ、2 本のファゴットのための協奏交響曲 (1779 年 8 月 3 日)
- 6 クラヴィーアと管弦楽のための協奏曲第 5 番ニ長調 KV 175 (1773 年)の第 1 楽章、第 2 楽章と新作の第 3 楽章「ロンドー」ニ長調 KV 382 (1782 年)
- 7 「ルーチョ・シッラ」 KV 135 より第 16 曲、ジュニアのアリア (1772 年)
- 8 小さなフーガは不明であるが、即興演奏だと思われる。パイジェットのオペラ「哲学者気取り、または星の占いたち」のアリア『主よ、幸いあれ』によるクラヴィーアのための 6 つの変奏曲へ長調 KV 398 (416e) (1783 年)、グルックのジグクシュピール「メッカの巡礼たち」のアリエッタ『愚民の思うは』によるクラヴィーアのための 10 の変奏曲へ長調 KV 455 (1784 年 8 月 25 日)
- 9 レチタティーヴォとロンドー『わが憧れの希望よ！—ああ、おまえは知らないのだ、その苦しみがどんなものか』 KV 416 (1783 年 1 月 8 日)
- 10 交響曲第 35 番ニ長調「ハフナー交響曲」 KV 385 より第 4 楽章 (1782 年 7 月)

演奏会の模様は、ハンブルク・クラーマーの「音楽雑誌」5 月 9 日号に報じられている。

今日、有名なクラヴィーア奏者モーツァルト氏は、国民劇場で演奏会を催した。彼自身の非常に人気のある作品が上演された。この演奏会は大変な大入りに恵まれた。モーツァルト氏がフォルテピアノで演奏した二曲の新しい協奏曲と幻想曲は大喝采を博した。いつもの習慣と違って演奏会を通して臨席された我等が君主も全聴衆もかつて例を見ない程の大拍手を送った。演奏会の収入は合わせて 1600 グルデンに上った。

当時の演奏会は、長丁場だった。シュタインフルト伯爵の旅行記に 1790 年 10 月 15 日金曜日、フランクフルト市立劇場のホールで行われたモーツァルトの大演奏会のことが記されている。それによると、「午前 11 時に始まった演奏会は、終演が 2 時近くになってしまい、皆が食事を求めたため、最後の交響曲は演奏されなかった。作品毎に非常に長い休憩があったので、演奏会は 3 時間かかった。」とある。ちなみにこのマチネーの演奏会はプログラムから考えると 2 時間半はかかりそうだが、最後の交響曲が演奏されなかったとあるので、2 時間分の演奏会が作品毎の長い休憩で 3 時間になったのであろう。皇帝ヨーゼフ 2 世臨席のブルク劇場での演奏会は、開演が午後 7 時とすると、終演は午前様になっていたのではないだろうか。これをそのまま再現すると夕食の時間になってしまうので、本日の演奏会では、この中から、1、5、6、8、10 を演奏する。

当時の演奏会は、交響曲で始まり、交響曲で終わるのが一般的であった。第 1 部の最後や第 2 部の最初に交響曲が演奏されることもあった。開幕の交響曲は「序曲 (Ouverture)」と呼ばれることもあり、閉幕の交響曲は、「最後の交響曲 (Schluß-Sinfonie)」とプログラムに記載されることもあった。モーツァルトが父に宛てた手紙で閉幕の曲は、*das letzte Stück von der ersten simphonie* となっている。最初の交響曲の最後の曲、すなわち、開幕で演奏したハフナー交響曲の終楽章と解釈されているが、交響曲の単一楽章がコンサートの一つの曲目として演奏されることもあったようである。1787 年 3 月 21 日にヴィーンのケルトナートーア劇場 (現存しない。跡地に

ザッハートルテで有名なホテル・ザッハーが建っている。)で行われた演奏会では、モーツァルトの交響曲で幕が開け、フィッシャーが歌うピッチーニのアリア、ファゴット協奏曲(ラウツナー独奏)、リギーニのアリア(フィッシャー独唱)とあって、5曲目に **Ein Stück von einer Sinfonie** とある。その後、モーツァルトの新作のアリア、アロイジア・ランゲが歌うサルティのロンドー、ウムラウフのロマンツェ(フィッシャー独唱)、最後にモーツァルトの交響曲で幕が閉じられた。5曲目は何かの交響曲の一つの楽章が演奏されたのかもしれない。

御前演奏会の閉幕の曲 **das letzte Stück von der ersten simphonie** (最初の交響曲の最後の曲) がハフナー交響曲の終楽章を意味するとして、開幕の交響曲はどのように演奏されたのであろうか。モーツァルト書簡全集を編集したアイブル、新モーツァルト全集の編集者であるマーリング、コーネル大学のザースロウらは、いずれも開幕の交響曲 **Die Neue Hafner simphonie** はハフナー交響曲の第1楽章から第3楽章までが演奏されたと考えている。1994年3月5日に行った第20回定期演奏会で、私たちは実際にこの形式で演奏してみたが、第3楽章メヌエットでいったんハフナー交響曲を中断し、別の楽曲を演奏することに違和感を覚えた。本当に御前演奏会でこのように演奏されたのであろうか。当時の演奏会のプログラムは数多く残されている。例えば、1785年12月9日、マンハイムで行われた演奏会では、モーツァルトの序曲(交響曲)で幕が開き、プラティのシェーナ、ヤルノヴィックのヴァイオリン協奏曲、ハイドンの交響曲で第1部を閉め、シュターミッツのコンチェルタンテ、ヴェントリンク母娘が歌うチマローザの二重唱、最後はヨメリの交響曲だった。これが、当時の一般的な演奏会の構成である。こういった演奏会で、冒頭の交響曲が途中で中断されたり、最後の交響曲が終楽章のみ演奏されたということは考えにくい。本当に幕開けの交響曲は、第1楽章から第3楽章までしか演奏されなかったのであろうか。この点は、書簡全集を高橋と共に日本語に編訳した海老沢も指摘している。

交響曲第35番ニ長調「ハフナー交響曲」KV385 は、もともと故郷ザルツブルクのジークムント・ハフナーの爵位授与式のための祝典音楽として作曲された。モーツァルトが「新ハフナーシンフォニー」と言っているのは、1776年7月21日に行われたハフナーの結婚式の前夜祭のために「ハフナー・セレナーデ」KV 250を作曲したからである。父レーオポルトからハフナーのために新しいシンフォニーを作曲してほしいと依頼を受けたモーツァルトは、ちょうど、1782年7月16日に初演されるオペラ「後宮からの誘拐」KV 384の上演準備で大変忙しかった。7月20日付の父への手紙によると、来週の日曜日までにオペラから人気の曲を抜粋して管楽器用に編曲しなければならないのに、「新しいシンフォニーを一曲書かなくてはならないとは！」と言いながらも、父親のために犠牲を払って、急いで良い作品を書き上げる約束をしている。度重なる父からの催促に応じてなんとか7月27日に「最初のアレグロ」を送った。7月27日付の父への手紙に、7月31日に残りの2つのメヌエットとアンダンテと終楽章、できれば行進曲も送ると記している。しかし、7月31日には、終楽章しか完成しておらず、8月7日付の父宛ての手紙で、やっと行進曲を含め残りの楽章が完成したと伝える。

短い行進曲を同封します！——すべてがうまく間に合い——あなたの好みに合うといいのですが。——第1楽章のアレグロは、すごく情熱的に——終楽章は——できるだけ速く演奏されなくてははいけません。

Hier schicke ich ihnen einen kurzen marsch! – Wünsche nur das noch alles zur rechten zeit kommen möchte – und nach ihrem geschmack seye. – Das Erste Allegro muß recht feurig gehen. – Das letzte – so geschwind als es möglich ist.

この手紙はこれまで「第1楽章のアレグロは火のように演奏されなければならない」と訳されることが多かった。どう演奏すれば火のように表現できるのだろう……。火だっているいろいろある。独和辞典を引いて *feurig* を調べてみると、「①火のついた、燃えている②火のような、火のように赤い、ギラギラする③情熱的な、熱烈な、激しい」という意味の形容詞であることがわかる。確かにこの第1楽章は、冒頭のオクターブの跳躍と行進曲のテーマで統一され、第二主題がないので落ち着くことなく常に突き進んでいる。また、異様に *sf*(スフォルツァンド; 強いアクセントをつける)が多い。まるでベートーヴェンの楽譜を見ているようだ。モーツァルトは決して淀むことのない、激しく情熱的な演奏を求めたのであろう。8月4日、父の反対を押し切って初恋の人アロイジーアの妹コンスタンツェと結婚式を挙げた。その3日後、行進曲と完成した残りの楽章を父に送った。7月29日に行われたジークムント・ハフナーの爵位授与式には間に合わなかったと思われるが、8月24日付の父への手紙で、「例のシンフォニーがお父さんの気に入ってもらえたのでうれしいです。」と伝えている。オペラ「後宮からの誘拐」KV 384の初演の頃に書かれたとあって、終楽章の第1主題は、オスミンのアリア(第19曲)『はは、おれは勝ったぞ。おまえらを置き場に引っ張っていき、首をつってやる』からとられている。

その後、12月4日付け、12月21日付けの父への手紙で「ぼくがあなたの求めに応じてハフナーのために書いたあの新しいシンフォニーを送ってください」と依頼している。1月4日、1月8日、1月22日そして、2月5日にも催促している。

例のシンフォニーを、とくに最後の曲を——できる限り早く送ってください。——なぜなら、ぼくの演奏会は四旬節の第3日曜日、つまり3月23日に開かれる予定で、まだなんども写譜をしてもらわなくてはならないからです。——そういうわけで、もし写譜されていないのなら、ぼくがそちらに送った通りの原譜で送り返してもらった方がありがたいのです。——そして、メヌエットも一緒に入れてくださいね。——

ようやく、モーツァルトは、セレナーデニ長調 KV204 (213a)、交響曲第29番イ長調 KV201 (186a)、交響曲第24番変ロ長調 KV182 (173dA)、交響曲第25番ト短調 KV183 (173dB)と共にハフナー交響曲を手に入れる。2月15日付けの父への手紙で、大急ぎで書き飛ばしたハフナー交響曲は意外にもよくできていたと次のように述べている。

お送りくださった音楽に心から感謝しています!・・・(中略)・・・新しい「ハフナー・シンフォニー」には、まったく驚きました。——だって、ぼくはもうまったく忘れていましたからね。——間違いなく、すばらしい効果を発揮するでしょう。

そうして「ハフナー交響曲」は、3月23日の御前演奏会でヴィーンの聴衆に初めて披露された。2月5日付の手紙でメヌエットも送るように依頼しているのは、何を意味しているのであろうか。ザルツブルクではメヌエットのない交響曲もよく演奏されたが、ヴィーンでは交響曲にメヌエットは必須だった。また楽章を作曲した順にバラバラに父に送ったので、おそらく綴じられていなかった。それで、父がメヌエットを同封するのを忘れないように伝えたのであろう。現在残されているモーツァルトの自筆総譜は12段の五線紙で、モーツァルトが1782年7月に作曲した際、2段目から11段目までを使用した。上から順に第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、第1オーボエ、第2オーボエ、2本のホルン、2本のトランペット、ティンパニ、2本のファゴット、バスとなっている。その後、第

1 楽章と終楽章に 2 本のフルートを 1 段目に、2 本のクラリネットを 12 段目に追加している。ただ、1785 年に交響曲第 33 番変ロ長調 KV 319 と共にアルターリアから出版された楽譜にはフルートとクラリネットは含まれていなかったことから、御前演奏会では、フルートとクラリネットがないオリジナルの版で演奏されたのではないかと考えられる。「ハフナー交響曲」はこの御前演奏会の後もたびたび演奏されたが、現存するすべての筆写譜にはフルートとクラリネットは含まれておらず、どういった経緯で自筆譜にフルートとクラリネットが追加されたのか、わかっていない。ひょっとすると日の目を見なかったのかもしれない。

御前演奏会の第 5 曲目に演奏された、「ぼくの最近のフィナルムジークから、小コンチェルタントシンフォニー」は、ポストホルンセレナード(1779 年 8 月 3 日に完成)から抜粋された **2 本のフルート、2 本のオーボエ、2 本のファゴットのための協奏交響曲 1 長調 KV320** である。オッフエンバックの出版社 J.アンドレがモーツァルトの自筆による 2 楽章の「シンフォニア・コンチェルタンテ」を所有していた、とケッヘルカタログに記載されていることから、ザルツブルクから取り寄せたポストホルンセレナードから 2 つの協奏的楽章をモーツァルト自身が筆写して独立した楽曲に仕立て直したのであろう。また、ザルツブルクで作成された 2 つの楽章からなる「シンフォニア・コンチェルタンテ」の筆写譜の表紙には、父レーオポルト・モーツァルトの筆跡で以下のように記載されている。2 本のヴィオラ、2 本のホルンも独奏楽器として表されている点が興味深い。

| | | |
|--|---|-------------|
| Sinfonia Concertante / a / 2 Oboe | } | Concertanti |
| 2 Flauti | | |
| 2 Viole | | |
| 2 Fagotti | | |
| 2 Corni | | |
| e / 2 Violini / col / Basso / Di Amadeo Wolfgango Mozart | | |

ちなみに、多くの書で、この「小コンチェルタントシンフォニー」は、CONCERTANTE の表示があるポストホルンセレナーデの第 3 楽章のみが演奏されたとしているが、これは誤りである。

パイジェットのオペラ「哲学者」気取り、または星の占いたち」の aria『主よ、幸いあれ』によるクラヴィーアのための 6 つの変奏曲 1 長調 KV 398 (416e) は、御前演奏会の 8 番目、即興演奏の部で演奏された。この曲の主題は、1781 年 5 月 22 日にヴィーンでドイツ語版で上演された、パイジェットのオペラ「哲学者気取り、または星の占いたち」の第 1 幕の aria から採られている。現存する楽譜は 1786 年、アルターリアから出版されたものである。モーツァルトが父に宛てた手紙に「これはもう一度アンコールしなくてはなりませんでした。」とあるように、大変好評だったようである。グルックのジグシュピール「メッカの巡礼たち」のアリエッタ『愚民の思うは』によるクラヴィーアのための 10 の変奏曲 1 長調 KV 455 も即興で演奏された。この曲の主題は、1780 年 7 月 26 日にヴィーンでドイツ語版で上演された、グルックのジグシュピール「メッカの巡礼たち」から採られた。1784 年 8 月 25 日の日付が自作作品目録に記載されているが、これは楽譜として完成した日である。2 種類の自筆譜が残されており、即興で演奏されたために、色々なバリエーションがあったことが推察される。モーツァルトは、東方に舞台をとったグルック作曲の「メッカの巡礼たち」からヒントを得てオペラ「後宮からの誘拐」KV 384 を作曲している。御前演奏会にはグルックも来ていたのであろう。グルックに敬意を表して「メッカの巡礼」のテーマで即興演奏を行った。当時、

皇王室宮廷音楽家の地位にあった 68 歳のグルックはモーツァルトを高く評価しており、たびたび食事に誘うことがあった。御前演奏会直前の 3 月 11 日、かつての恋人アロイジーアがブルク劇場で行った演奏会の様子が 3 月 12 日付の父宛ての手紙に書かれている。

きのう、義姉のランゲ夫人が劇場で演奏会を開き、ぼくも協奏曲を 1 曲弾きました。——劇場は大入り満員でした。そして、ぼくはまたしてもヴィーンの聴衆にとっても温かく迎えられたので、すっかりうれしくなりました。——ぼくが舞台から去ったあとも——聴衆の拍手が鳴りやまないの——ぼくはもう一度ロンドーを弾かなくてはなりません。——すると、まさに嵐のような拍手です。——これは 3 月 23 日の日曜日に予定しているぼくの演奏会のよい宣伝になります。——ほかに、コンセール・スピリチュエルのために書いたぼくのシンフォニー（注：交響曲第 31 番ニ長調「パリ交響曲」KV 297(300a)）も演奏しました。——義姉は、例のアリア『私は知らぬ、このやさしい愛情がどこからやってくるのか（注：KV 294）』を歌いました。——ぼくの妻がいたランゲ夫妻の棧敷席の隣に、グルックが来ていました。——彼はぼくのシンフォニーとアリアをしきりに誉めて、次の日曜日にぼくら 4 人全員を昼食に招待してくれました。

この演奏会でモーツァルトが演奏した協奏曲が、御前演奏会で再演したクラヴィーアと管弦楽のための協奏曲第 5 番 ニ長調 KV175 である。この曲はもともと、1773 年 12 月にザルツブルクで作曲されたが、モーツァルトは、新しいロンドー ニ長調 KV 382 をヴィーンの聴衆の趣味に合わせて作曲し、終楽章をこれに差し替えたのである。3 月 11 日の演奏会ではこの新作のロンドーがアンコールでも演奏された。この新作のロンドーは、1 年前の 1782 年 3 月 3 日にもブルク劇場で演奏しており、その後、3 月 23 日に楽譜をザルツブルクの父に送っている。モーツァルトはことのほかこの曲を愛していたことがわかる。

同時に終楽章も送っておきます。——これはニ長調の協奏曲用に作ったもので、ヴィーンで大評判になったものです。——でも、どうか宝石のように大事に保管してくださいね。——誰にも弾かせないで。——マルシャンや彼の妹にも弾かせないでください。——これはぼくの専用に作曲したもので——愛するお姉さん以外、誰も演奏してはいけません。

モーツァルトがヴィーンのマルタ・エリーザベト・フォン・ヴァルトシュテッテン男爵夫人に宛てた 1782 年 9 月 28 日付の手紙にもこのようなことが書かれている。

ぼくが劇場で弾いた協奏曲のことですが、やはり 6 ドゥカーテン以下では手放したくありません。その代わり、写譜の費用はぼくが持ちます。

1783 年 1 月 22 日付けの父への手紙の中で、モーツァルトは、この協奏曲のカデンツァとアインガンク（即興的なパッセージ）をザルツブルクに住む姉ナンネルルに送ると述べている。

お姉さんに機会があり次第、カデンツァとアインガンクをお送りします。——ロンドーのアインガンクはまだ書き直していません。だって、ぼくはこの協奏曲を弾くときはいつでも、そのとき感じたことを弾くからです。

この協奏曲の自筆総譜はベルリンのグラスニツクのコレクションにある。表紙には、**Concerto per il clavicembalo del Sgr. Cavaliere Amadeo Wolfgango Mozart nei Dicembre 1773**と記載されている。もともとは、チェンバロのための協奏曲だった。当時のザルツブルクでは、クリストフ・フォリが発明したフォルテピアノは普及しておらず、チェンバロが一般的だった。モーツァルトはこの協奏曲を作曲するまで、ラウパツハ、ショーベルト、ホーナウアー、クリスティアン・バッハのソナタを協奏曲に編曲するという練習を重ねてきた。この協奏曲第5番が生まれて初めて書いたオリジナルの協奏曲であり、強い思い入れがあった。モーツァルトは、1774年のミュンヘン旅行、1777年～1778年のマンハイム・パリ旅行にこの曲を携えており、1778年2月13日、マンハイムのカンナビヒ邸で演奏している。モーツァルトはこの時、アウグスブルクでシュタインのフォルテピアノに出会った。オッフエンバックのアンドレには不完全であるが、自筆パート譜が現存している(終楽章はザルツブルクで作曲されたもの)。これは、モーツァルトの死後、コンスタンツェから買い取ったものである。この自筆パート譜の第1オーボエと第2オーボエの楽譜は、ベルリンにある自筆総譜と異なっているが、1879年にブライトコップフ・ウント・ヘルテルから出版されたモーツァルト全集の総譜と同じである。ザルツブルクの聖ペーター教会に保管されている筆写パート譜にはオリジナルの終楽章と1782年の2月に作曲した新しい終楽章ロンドーKV382の2種類の終楽章が含まれており、第1オーボエ、第2オーボエ、第1ホルンの楽譜はアンドレにある自筆パート譜やブライトコップフ・ウント・ヘルテルの総譜と同じのものであった。この聖ペーター教会に保管されている筆写パート譜は1782年から1784年にザルツブルクで使用された五線紙が使用されていた。1782年3月23日、モーツァルトは父宛に新しいロンドーKV382と共にこの協奏曲を送っている。その際にコピーが作られたのであろう。ちなみに1783年1月にモーツァルトが姉宛てに送ったカデンツァもその自筆譜が聖ペーター教会に保管されている。しかし、それは、第1楽章、第2楽章と新しいロンドーのもので、オリジナルの第3楽章のものは現存していない。

整理すると、この協奏曲には3つの版があり、第1版は1773年に作曲されたオリジナルのチェンバロ協奏曲、第2版は1782年までに第1オーボエ、第2オーボエ、第1ホルンを書き換えた、オリジナルの終楽章を伴った版、そして第3版は第2版の改訂に加えて1782年に終楽章を新作のロンドーに入れ替えた版である。新作のロンドーにはフルートが使われていることから考えて、マリウス・フロトホイスは新しい終楽章を作曲する前にフルートを追加した版(第2版)を作成したのではないかと想像している。なぜなら、「第2版のオーボエパートは第1版のオーボエパートより低い音域を使っているから」である。この主張は正しいのだろうか。確かに第1楽章の第一主題などはその通りであるが、逆に高い音域に修正されている部分もある。第1ホルンの音域も低くする理由がわからない。また、これまでにそのようなフルートのパート譜は発見されていない。さらに、モーツァルトが1784年に作曲したクラヴィーア協奏曲第15番 変ロ長調 KV450で、華やかさを添えるフルートは、終楽章ロンドーのみに使用されているのだ。フロトホイスが言うように、すべての楽章にフルートを使う必然性はない。私は、一つのありうる説明として、これがもともとチェンバロのための協奏曲として作曲され、その後フォルテピアノのための協奏曲として使用されたことによるのではないかと考える。チェンバロを独奏楽器とした場合の協奏曲は、サロンのような小さな部屋で演奏され、管弦楽は、おそらく各パートは一人ずつだったと思われる。一方、ブルク劇場のような1350名を収容する5階席まである大劇場で、フォルテピアノを独奏楽器とした場合の管弦楽は、大人数の伴奏で演奏されたはずである。モーツァルトはそれに合ったオーケストレーションになるよう、より内声を補強すべく管楽パートの修正を行った可能性を指摘したい。

(2013年3月19日)

【参考文献】

1. Eisen Cliff: Addenda zu Mozart - Die Dokumente seines Lebens - Neue Folge, Bärenreiter Verlag (1997)
2. Christoph-Hellmut Mahling: Wolfgang Amadeus Mozart, Sinfonie in D „Haffner-Sinfonie“ KV 385, Bärenreiter Verlag (1970)
3. Sydney Beck: Wolfgang Amadeus Mozart, Symphony No.35 in D K.385 “Haffner” Symphony, Oxford University Press (1968)
4. Christoph-Hellmut Mahrling und Friedrich Schnapp, vorgelegt von Henning Bey: Kritischer Bericht, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 11: Sinfonien, Band 6, Bärenreiter Verlag (2004)
5. Marius Flothuis: Wolfgang Amadeus Mozart, Konzert für Klavier und Orchester in D KV 175 / 382, Bärenreiter Verlag (1972)
6. Marius Flothuis: Kritischer Bericht, Serie V: Konzert, Werkgruppe 15: Konzerte für ein oder mehrere Klaviere und Orchester mit Kadenzten, Band 1, Bärenreiter Verlag (1991)
7. Christa Landon: Wolfgang Amadeus Mozart, Serenade KV 320 „Posthorn-Serenade“, Ernst Eulenburg & Co GmbH (1960)
8. Walter Senn: Wolfgang Amadeus Mozart, Serenade in D „Posthorn-Serenade“ KV 320, Bärenreiter Verlag (1981)
9. Kurt von Fischer: Wolfgang Amadeus Mozart, Serie IX: Klaviermusik, Werkgruppe 26: Variationen für Klavier, Bärenreiter Verlag (1961)
10. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage, Breitkopf & Härtel (1983)
11. Neal Zaslaw: Mozart's Piano Concertos – Text, Context, Interpretation, The University of Michigan Press (1996)
12. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989)
13. Alan Tyson: Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987)
14. オットー・エーリヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989)
15. 久元祐子: モーツァルトはどう弾いたか, 丸善ブックス (2000)
16. 久元祐子: モーツァルトのピアノ音楽研究, 音楽之友社 (2008)
17. 伊東信宏 編: ピアノはいつピアノになったか?, 大阪大学出版会 (2007)
18. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集III, 白水社 (1987)
19. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995)

Osaka Mozart Ensemble 56. Konzert

Toyonaka Aqua Bunka Hall, Samstag, 20. April 2013, 15.00 Uhr

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Sinfonie Nr. 35 „Haffner-Sinfonie“ D-Dur KV 385 (März 1783)

交響曲第35番「ハフナー交響曲」ニ長調 KV 385

I. Allegro con spirito

II. Andante

III. MENUETTO mit Trio

IV. Presto

Konzertante Sinfonie nach der „Posthorn-Serenade“ G-Dur KV 320 (3. August 1779)

2本のフルート、2本のオーボエ、2本のファゴットのための協奏交響曲 ト長調 KV 320

I. CONCERTANTE: Andante grazioso

II. RONDEAU: Allegro ma non troppo

．．．．． 休憩 Pause ．．．．．

Sechs Variationen über die Arie „Salve tu, Domine“ aus der Oper *I filosofi immaginari* (Giovanni Paisiello) F-Dur KV 398 (416e) (1783 / 1784)

パイジェットのオペラ「哲学者気取り、または星の占いたち」のアリア『主よ、幸あれ』によるクラヴィーアのための6つの変奏曲 ヘ長調 KV398 (416e)

Zehn Variationen über die Ariette „Unser dummer Pöbel meint“ aus dem Singspiel *Die Pilgrime von Mekka* (Christoph Willibald Gluck) G-Dur KV 455 (25. August 1784)

グルックのジルクシュピール「メッカの巡礼たち」のアリエッタ『愚民の思うは』によるクラヴィーアのための10の変奏曲 ト長調 KV 455

Konzert für Klavier und Orchester Nr.5 D-Dur 3. Fassung KV 175 + 382 (Februar 1782)

クラヴィーアと管弦楽のための協奏曲 第5番 ニ長調 KV 175 + 382

I. Allegro

II. Andante ma un poco adagio

III. Rondo: Allegretto grazioso – Adagio – Allegro – (Tempo primo)

Sinfonie Nr. 35 „Haffner-Sinfonie“ D-Dur KV 385 (März 1783)

交響曲第35番「ハフナー交響曲」ニ長調 KV 385

IV. Presto